

## 平成30年度 第1回四万十町人づくり委員会 会議結果（要旨）

日時：平成30年12月10日（月） 14:00～16:00

場所：四万十町農村環境改善センター 大会議室

〔出席委員〕 佐竹 孝太、武田 伸也、川添 節子、田邊 法人、岡村 健志、新井 みなみ、  
岡田 光司、小野川 貴江

〔欠席委員〕 吉本 悦子、門舛 俊也、松岡 千津恵、中野 千里

### 【会議次第】

1. 開会
2. 新委員紹介
2. 新委員長あいさつ
4. 議事
  - 1) 平成30年度事業説明について
    - ・未来塾（四万十町高校応援大作戦他）
    - ・四万十塾（イノベーター養成講座他）
    - ・産業振興塾（農業者ネットワーク他）
  - 2) その他
5. 閉会

### 【会議結果】

（事務局）

只今より人づくり委員会を開始する。現在、委員長が不在のため、新委員長が決定するまで副委員長の岡村委員に進行をお願いする。

（岡村副委員長）

事務局から新委員のご紹介をお願いします。

（事務局）

新委員の紹介と委嘱状の交付

（岡村副委員長）

続いて、委員長の選任を行う。委員長は、要綱の規定により委員の互選で決定するが、まず事務局から提案があればお願いします。

（事務局）

前委員長が、窪川高校の森本校長だったので、引き続き窪川高校校長の田邊委員にお願いしたい。

(岡村副委員長)

事務局から田邊委員との提案があったが、どうか。

(全委員)

異議なし

(岡村副委員長)

事務局提案のとおり、委員長は田邊委員にお願いする。委員長から一言ごあいさつを。

(田邊委員長)

窪川高校の田邊です。この4月に赴任して以降、町から様々な支援を受けており、日々プレッシャーを感じながら頑張らないといけないと思っている。元々、黒潮町出身で、人が減っていくなかで人づくりは戦略的・計画的にゴールに向かう大事さを常々感じていたが、このような委員会が四万十町にはあると知って驚いた。ただ、この会の実態自体がわからない部分もあるので、皆さんと一緒に勉強できればと思っている。

では、次第にしたがい進行する。議題1の平成30年度の事業報告について、未来塾の説明をお願いします。

(事務局)

事務局説明 未来塾の事業報告 (資料 P1～P6)

(新井委員)

高校応援大作戦の目標である地元入学者数は、平成30年度は何%だったのか。

(事務局)

四万十町全体で約32%。窪川高校が約23%、四万十高校が約42%で、平成27年度とほぼ変わらない。

(新井委員)

未来塾は、ほぼ高校生向けの事業だが結果が出てないのは、少し検討する必要があるのではないか。2年連続で入学者が20人を切ると統合すると言われているが、地元高校を存続させる行動と今ある高校を応援する事では意味合いが変わると思う。高校に充てられる予算が大きく、他の事業も保護者向けが多いのも気になる。小・中学校は教育委員会の管轄だが、未来塾がどんな役割を持ち、どこまで発言権があるのか。目標設定や教育方針は、教育委員会が決めると思うが、未来塾で何処までできるかが大事かと思う。

(田邊委員長)

未来塾が高校に偏っているのは、根本に人材流出があるかと思う。町内進学率が30数%という状況下で、15歳で町外に出る事を食い止めるために、高校が魅力的でもっとアピールし、18歳まで地元に残れば、郷土愛も育まれて町の未来を元気にする人材になる事を目的にしていると思う。現在は、その途中で結果が出ていないかもしれないが、そんな想いで取り組んでいると思う。ただ、その想いに応えられない自分にも責任を感じている。

(新井委員)

もし入学者数を増やしたいのであれば、中学校と高校の連携がもっと必要。交流があれば「あの先輩がいるから行きたい。」となると思う。交流する時間を取ろうと思えばできるが、やってない事が気になる。また、地元高校への進学するメリットが、その先にあるなら親は行かせたいと思う。ただ、大人の都合では地元に残ってほしいと思うが、子ども目線でも魅力のある町かどうかも重要。高校に力を入れることは大事だが、大人が努力する必要がある、小学生からも高校がどんな所かわかる仕組みも必要。この地域ではできると思うので、連携する事が大事だと思う。

(事務局)

四万十高校で20人以上の入学者を確保するには、大正・十和地域から60%以上が進学する必要があり、非常にハードルが高くなっている。四万十高校は、連携型中高一貫としての連携や、窪川高校と窪川中学校の交流促進は、未来塾を行う中でも実感している。現在、高校に特化しているが、高校を通じて中学校・小学校に目を向けることもあり、高校まで町内で育てる環境とは何かと考えるきっかけにもなっている。それらをブラッシュアップし、いずれ教育行政に繋げたいので、少し長い目で見ながら色々と意見をいただきたい。ただ、31年度の町内入学者数の達成は難しい状況にあり、今後は検証と見直しを行いたい。

(新井委員)

中学校と高校の連携は、すぐできると思う。できる事から始めたら良いと思う。

(佐竹委員)

先輩がいるから進学する事はあると思う。現在、部活や先輩の関係で須崎高校に進学している気がするので、先輩・後輩を繋げる事は進学率の向上に効果的だと思う。ただ、この問題の解決事例は他地域にないのか。それを調べて、この委員会で勉強しに行く事も大事かと思う。

また先日、商工会でマネジメントゲームを行ったが、高校の時は勉強を活かす実感がなかったが、経営等に関わりだすと、これらの勉強も新鮮な気持ちで取り組むことができる。これから人材を育てる上で、働く意義や経営を少しでも学んでおけば、就職した時に生きてくると思う。オランダの高校生は、商売する上での客単価や1時間の売り上げ等も計算できるようになると聞いた。それが良いと言うのではなく「わかる」事が大事だと思っている。自分も農業者であり、商工会青年部にも所属しているので、連携できる事があれば、ぜひご相談をいただきたい。

(新井委員)

今話を聞いて、地元高校に進学しなくても、将来四万十町に帰ってきたくなる事が大事かと思った。高校存続に特化するのではなく、例えば、町外高校に進学したとしても町に帰ってきたいと思うような仕掛けが大切だと思う。

(岡村副委員長)

何を行ったら良くなるかは、正直わからない。今回、目標としている地元入学率を30数%から60%にする事は、実は壮大な目標で、それに対する直接的な方法はきっと余り無く、高校のイメージは直ぐに変わらない。ただ、改善したり目標について考えたりする事が、今できる事かと思う。この応援大作戦は、島根県津和野町のモデルを勉強して出されたアイデアだと思うが、津和野町は全国から生徒を募集し、パイを変えている。四万十町はパイを変えず、生徒の取り合いをしているのが、今の状況かと思う。

(新井委員)

海外研修事業は、応募者全員が参加できるのか。テストや作文等で審査しないのか。ただ、先ほど費用対効果についての説明があったが、それは別になくても良いのではないか。費用対効果ではなく、希望する生徒のポテンシャル等を判断して行かせてあげて欲しい。

(岡村副委員長)

多少の努力があって行くようになれば良い。研修先で何をしたいか等の小論文は書かせていないのか。

(事務局)

それは、行っている。今回11名の応募があり、結果的に全員参加となったが、審査の段階で作文の提出や個別面談等を行った。

(新井委員)

面談等でしっかりフォローをしていると説明があったが、それは非常に良かったと思う。この研修に参加した生徒で、将来海外で働くようになったとか事例が出てくれば、実施して良かったと思う。

(岡村副委員長)

海外研修事業に、費用対効果の判断基準は必要なのか。公費で海外に行く事に対する外からの意見を気にしている事かと思うが、そこまで考える必要はあるかなという気もする。

(佐竹委員)

行かせる基準をしっかりとし、子どもに投資していると明確に言えば良いと思う。以前、窪川町では、約10日間ヨーロッパで研修する事業があり自分も様々な年齢の方々と参加したが、視点は広がるし、現地の空気感や匂いを感じるだけでも大事だと思った。ただ、高校生だけでも視点は変わるが、可能であれば町内の大人も同行し、気づいた点等を話すだけでも刺激になるかと思う。勿

論、審査も行い、個人負担も取って。高校生は、社会に出る事も迫っているし、そこで交流した大人と、町で会ってあいさつする関係性が生まれたら、四万十町は良い町だと思ったりするのではないかな。

(田邊委員長)

異年齢との交流は、高校の総合学習に限らず「町で育ててもらおう」という視点が大事だと思う。教室では同じ年齢同士で過ごすため、多様な人々と触れ合う機会を作る事は大きなテーマだと思っており、来年度以降で考えている事もある。また、海外研修は、以前の赴任校でもあったが、四万十町は事前学習を丁寧にやっていることに驚いた。私が引率した時は、教員であるため、普通に授業を行いながらの対応となり、参加生徒と事前に深く付き合えず、2・3回レクして出発していた。こちらは、英会話から個々のゴール設定まで行い、さらに研修中も面談を行い、課題解決に向けたサポートがあった事が良かったと思う。費用対効果に関しては、わからない部分もあるが、この事業は他市町村には無い良いプログラムだと思った。

(武田委員)

高校に特化しすぎているので、中学校も交えた取り組みをという意見だったが、小学校からやらないといけないと思う。今、中学校に進学する時点で、町外に進学する生徒が約20名もいる。それぞれ事情はあると思うが、20名は1クラスできる人数であり、小学校・中学校でしっかり手立てをしておかなければ、その20人が窪川高校に進学しようとは思わない。早い段階から、小学校と中学校、中学校と高校とが連携していかなければ、入学率は上がらないと思う。また、大学のオープンキャンパスバスツアーではどんな感想があったのか。特に、窪川高校の参加者が少ないが、そもそも大学に魅力を感じていないのか、それとも就職を目指しているのか、どんな声があったか知りたい。

(田邊委員長)

窪川高校は、今年度校内の募集方法の変更により、準備不足や周知不足があった事が要因かと思う。ただ、窪川高校では、県事業で高知工科大学に1年生が全員訪問したり、保護者と行っている場合もあり、大学が遠い存在という訳ではないと思っている。勿論、オープンキャンパスは、大学教員や大学生とのふれあいや、他校生徒との交流による刺激等を早い段階から体験する事は良いと思う。特に、町内高校では、普段、他校の生徒と学習面で切磋琢磨をする事がないので、これらを利用し活かすような循環があれば、もっと良いと思うが色々と課題もあるのかと思う。

続いて、四万十塾の説明をお願いします。

(事務局)

事務局説明 四万十塾の事業報告 (資料 P7~P12)

(新井委員)

地域イノベーター養成講座やビジネスプランコンテストの近況や、受賞後の状況を報告する場があれば良いと思う。そのような発信があれば、税金をしっかりと活用していると感じ、どのようにプ

ランがあったり、課題が解決された等がわかれば、新たな受講に繋がったり、興味が沸くのではないかな。

(事務局)

その点は、事務局でも検討しており、今年度のビジネスプランコンテストでは、昨年度の大賞受賞者にプランの現況を報告してもらおう予定。ただ、イノベーター養成講座は、どのような情報発信が良いか悩んでいる。もう少し検討したい。

(岡村副委員長)

高知大の事であるが、この場を借りてお礼を。我々高知大学は、地域の大学として一等賞を取ろうと目指している。大学は、「教育」「研究」の柱とは別に「社会貢献」という柱があり、高知大では地域貢献と見立てて行っており、四万十町が連携してくれるのは非常にありがたいと思っている。生姜の病気対策は、自分もずっと聞いてきたが、これといった解決策がないと肌で感じているが、「無い」と言うより「無いだろう」と思い込んでいる感じがする。それらを少しでも打破できればと考え、先日、ここで学長が講演を行った。ただ、こういう取り組みは単発で終わることも多いが、今後も何らかの形で続けるように考えている。また、四万十町からは、コーディネーターとして職員を派遣してもらっている。自治体職員と仕事をする事は、大学側も勉強になることが多く、是非、今後も継続できたらと思っている。

(岡田委員)

イノベーターやトライセクターなどのカタカタ言葉が分かりづらいのではないかな。多くの人に受講してもらうのであれば、わかりやすい募集の仕方は必要と思う。

(田邊委員長)

次に産業振興塾の説明をお願いします。

(事務局)

事務局説明 産業振興塾の事業報告 (資料 P13~P16)

(新井委員)

良い取り組みだと思う。ただ、この事業対象に子どもは入っていないのか。地域の事業所に見学に行く機会も子ども達にはなく、農業体験も1日だけではなく年間通した体験があれば、未来塾での連携に繋がってくる。小さな頃から体験すると、将来が描きやすく、親の跡を継ぐ事や四万十町に残る事に繋がるのではないかな。また、大人も子どもへ説明する事は勉強になる。色々な連携の形があるが、小・中・高が一緒にできれば幅広い人材育成ができると思う。

(事務局)

未来塾との関りは、高校の総合学習で地域で活躍する人材を紹介している。ただ、3つの塾の横断的な取り組みは見いだせてない。産業振興塾も農業者ネットワークで何かやれる事もないか検討

や提案もしたいと思う。

(新井委員)

私も農家なので、子どもたちに種まきから収穫・販売まで見せることが大事と思い、パン屋に子どもたちと作ったかぼちゃペーストを販売し、そのペーストがパンになって返ってくる一連を体験させている。植物を育てる事と違った部分を見せられるので、そのような取り組みも農業が見えやすくなるので良いかと思う。

(岡村副委員長)

四万十町では、子ども達がナリワイ等に触れる機会はないのか。

(事務局)

農協が、年間を通じた農業体験を行っている。また、小・中学校で田植えや稲刈りを行っていたが、諸事情により止めている学校もある。学校も難しい面もあり、それらを請け負う体制等があれば良いかと思うが、上手くリンク出来ていないのが現状。

(新井委員)

農業だけでなく、様々な職業を見る事は良いと思う。学校内では、カリキュラム的に大変だと思うが、外部人材や行政が負担して開催すれば参加する人もいるのではないか。それに学校の勉強がリンク出来たら、佐竹委員の言われた経営等もイメージしやすくなるのではないか。

(川添委員)

窪川小学校は、農協と生姜農家と連携し、コンテナ生姜を栽培し、町自慢の生姜をどうやって発信するか等を考えさせている。その一環で、子ども達は生姜を使った商品の開発を行うが、昨年度は生姜せんべい、その前年には生姜ドーナッツを開発し、実際にスーパーや手仕事市で販売もした。その事は子ども達の自慢になっている。また違う学年では、農協の支援で田んぼを借り、米作りを行いながら、収穫祭や品種の違うお米の食べ比べや、どう宣伝していくか等を検討している。特に、生姜は、去年CATVでコマーシャルを作り、放送もした。

(新井委員)

そのような学校の取り組みは、校長会等で共有されているのか。

(川添委員)

各学校で行っている事は違うかと思う。ただ、町の教育方針に「ふるさとを愛する」「四万十町を愛する」があるので、それに沿ったカリキュラムは考えていると思う。

窪川小学校の総合的な学習は、テーマ等は伝えるが、子ども達が色々考えて取り組むようにしている。商品開発をした子ども達は、お米や生姜等を使ったB級グルメコンテストをわいわい広場で行い、チラシも千枚以上配布もしたので、多くの人で賑わった。ただ、総合的な学習の時間に校内研としても取り組んだが、県から学力向上の話もあり、算数や国語に力を入れているため、昨年度

程は取り組めていない。

(新井委員)

総合的な学習の時間が、外部と連携できれば、先生の負担も減らせるし、異動された場合の継続性も確保できると思う。他の学校にも広がれば良いと思う。

(川添委員)

学校支援本部事業が導入されているが、それらのコーディネートをする人材が重要。このような取り組みで育った人材が関わってくると、学校は非常に助かる。高校には高校魅力化コーディネーターがいるが、小学校も配置して欲しいくらいだ。

(新井委員)

PTA 会長がコーディネーターを兼任している場合が多く、外部の人材が就くのと PTA 会長が就くのでは大きく違う。コーディネーターが欲しいと皆が思っているし、コーディネーターになれる人材も育成していければ良い。

(川添委員)

ぜひ産業振興塾で、コーディネートできる人材の育成もお願いしたいと思う。

(田邊委員長)

補足ではないが、今年、高校の総合学習を見直す上で、高校魅力化コーディネーターに窪川小学校と窪川中学校の総合学習を調べてもらった。先ほどの発言のとおり、小学校の学習内容を把握し、高校での学習はどうすべきかと言った議論ができるようになった。小学校や中学校で学んでいる事が、高校でも成長できる仕組みが出来れば良いと思う。

(岡田委員)

(わいわい広場への協力に対するお礼) 以前にも、まちづくりという事で、パン屋のお孫さんが自分のお祖父ちゃんに町の活性化をどうすれば良いか皆で聞いたりしていたが、それらが今後のまちづくりに必要だと感じた。毎年行っている金太郎夜市は、第2週目に子ども夜市を行っているので、それらも活用いただければありがたいし、農業者ネットワーク等にも活用いただけたらありがたい。また、佐竹委員が言ったマネジメントゲームは、高校生でもできるし、経営や収益の流れを計画立てて行えるので、奥深いゲームになっている。職種を絞れば1日でも行えるし、もしかしたら子ども用もあるかもしれない。また情報があれば提供したいと思う。

(新井委員)

保護者仲間で子どものうちからお金の勉強をして欲しいという意見があった。外国では、お金の勉強が学校のカリキュラムにあたりるので、小中学校が連携して遊びながらやれば良いなど思う。



(岡田委員)

希望した学校だけだが、税務署が税金の授業に学校に行く取り組みもある。1億円と同じ重さのジュラルミンケースがあり、税金のはじまり等を学べるようになっている。

(岡村副委員長)

私は高知市に住んでいるが、高知市では小・中・高の連携は難しいと思うが、四万十町ならできるかと思う。私は、交通が専門だが、都会で渋滞緩和する事は難しいが、四万十町で通学路の安全対策という事であれば、何かを対応する事ができる。そういう部分が都会と地方と違うと昔話していた事が、今回出た意見のように、小学校や中学校などと話す機会もあっても良いかと思った。

(小野川委員)

この委員の選考は、役場が協議して決定しているのか。

(事務局)

委員選考は、各団体から充て職の場合もあるが、学識経験者等は執行部と事務局で協議して決定している。

(小野川委員)

委員名簿を見ると、ほとんど窪川地域から選出されている感があり、大正・十和地域の委員が少ない。本当に人づくりで町を何とかするのであれば、もう少し地域に偏りのない委員選出があればと思う。

(事務局)

事務局も、地域性は考慮して選考しているが、充て職で地域が偏ってしまう場合もあると感じている。この意見を参考に、また選考を考えたい。

(武田委員)

小学校では、米作りや商品開発をしているが、中学校が行っているのは事業所での職業体験となっている。事業所により違いもあるが、職業体験を受け入れても多忙で手が回らず、教える事ができない事が多い気もする。また、職業上、児童生徒を受け入れる立場にいるが、小学生は私たちに質問したり、来客者の事を考えたりするが、中学生になると質問も余り無く、作業をやって終わる事が多い。単なる作業で終わるのではなく、事業所も巻き込んで体験等も考えていかなければ、子どもも限られる中、地元を愛する子ども育成は進まないのではないか。色々なリスクもあるが、事業所にも理解を求め、様々な体験ができる体制が出来れば良いと思う。

(田邊委員長)

川添委員も言われたが、学力が問われる部分もあるが、やはり繋がりは大事だ。地域でできる事を大切に、戦略に合わせてアウトソーシング等も行わなければ教員だけで検討するには限界がある。学校外も含め、小・中・高や幼・保も含めた連携が必要だと感じる。

(新井委員)

次回は、何月頃開催するのか。

(事務局)

2月ごろ開催する予定。

(田邊委員長)

他にご意見はないか。無いようなら、今回はこれで終了する。

— 16時05分 終了 —